

2016国際平和のための世界経済人会議実行委員会

Session4：平和に貢献するソフトパワー・ビジネス【未定稿】

《登壇者（敬称略）》

・モデレーター

加治慶光（アクセンチュア株式会社 チーフ・マーケティング・イノベーター）

・パネリスト

塩沼亮潤 大阿闍梨（慈眼寺 住職）

鈴木寛（東京大学・慶応義塾大学 教授）

孫泰蔵（Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO）

○司会

これより、Session4「平和に貢献するソフトパワー・ビジネス」を開始いたします。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

それでは皆さん、3つ目のセッションであります、よろしいでしょうか。

皆さん、ありがとうございます。いよいよ3つ目のセッションになったのですが、今まで  
のセッションの中で、最も普段、平和を考えている人と、最も考えていない人のセッショ  
ンです。先ほど準備をしているときに、「いや、僕はかなり平和のこと、あまり日々考えら  
れない」という人と、「そのことを考えながら、日々暮らしている」という方がいらっしや  
いました。しかし、そこに、日々の営みの中で、遠く輝いている星のような平和を微かに  
思っている人たちの準備でありました。そのこと自体、大変意味があると思いますが、早  
速セッションに入っていきたいと思います。

このセッションは、皆さんとの会話の時間を非常に多く取っています。なので、どんど  
んジャンプインしていただいて、聞きたいこと、それから、自分の思ったことというものを  
言っていただければ。ただし、短く。それでは、開始していきたいと思います。

まずは、皆さん、（パネリストの）御三方がしておられる日々のお仕事。「今はこのよう  
なことをしているのだよ」ということをご説明いただきたいと思います。それでは、孫泰蔵  
さんからお願いします。スライドをお願いします。

○孫泰蔵（Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO）

はい。孫泰蔵と申します。よろしく申し上げます。この3人の中で明らかにおわりの通  
り、「一番平和を考えていない人」いうのは私でございます。

私は、この20年間、インターネットの分野でずっと起業をしてきて、本当にシリアル・アントレプレナーとしてやってきたのですけれども、この特に3年くらいは、自分が起業家として新しい事業をつくり続けるということだけでなく、「若い人たちを育成する」ということを、やはりやるべきだというように自分自身も非常に感じまして、Mistletoeという新しい取り組みをはじめました。それで、Mistletoeのことを、私たちは自分たちでは「Social Impact Studio」という新しい業態を目指して、今、やっております。どのようなことをやっているかということをご紹介したいのですけれども、私たちは、いわゆる伝統的なベンチャー・キャピタルとも違いますし、伝統的なインキュベーターとも違うのですけれども、新しいスタートアップを支援する活動をしています。お金はもちろんですけれども、お金だけではなくて、人材とか、それからいろいろなネットワークを紹介したり、ビジネス・ディベロップメントを手伝ったり、ということ、さまざまなリソースを投入して、今、大体30ぐらいのスタートアップを支援しています。それを支援するだけではなくて、私たちの中で6つのテーマがあるのですけれども、そのテーマに沿ったスタートアップを、さらに「オーケストレーション」と呼んでいるのですけれども、1つのオーケストラをつくるように、それぞれが力を合わせることで、いわゆるコレクティブ・インパクトを生み出すべくいろいろな取り組みを行うというようなことをやっています。

具体的に8つの分野がありまして、これを1つずつ説明することはやめますけれども、例えば、食糧が世界では不足しているとか、それから医療や健康の問題。特に先進国ではいわゆる高齢化の問題ですとか、それから環境の汚染ですとか、いろいろな問題がありますけれども、そういったものを解決したいということで、こういったいろいろなスタートアップをテーマごとにいろいろと応援をしていくということをやっています。

具体的に、例えばこの会社は、水の循環システムをつくってしまっていて、普通、シャワーですと、大人が4人、1カ月使うと大体アメリカ人だと1600リットルくらいの水が必要になるのですけれども、このシステムがあると、これはプロトタイプなのですが、20リットルの水でずっと半永久的に、ずっと綺麗なシャワーを使い続けられるというようなシステムです。ですから、例えば、もちろん水が少ない地域で、発展途上国のようなところでも使えると思いますし、難民キャンプのようなところで、緊急で水が必要な場合などにも役立つでしょう。

それから、Internet of Things、IoTのセンサーと、AI、つまり人工知能を使いまして、ゴミの回収を、劇的に生産性を上げる、コストを削減するというをやっているフィンランドの会社に投資をしていて、このソリューションが導入される前のゴミの回収コストを100だとすると、15%にまで削減されました。85%のコスト削減をすることができるようになりました。なぜかという、AIによって予測をすることで、最適なゴミの回収ができる

ようになったからですね。彼がその創業者なのですけど。

それから、こちらはいわゆる UAV、無人の飛行機。ドローンなのですけれども、これも人工知能を積んでいて、自分で風を読んで、風に乗って飛んでいく。普通の Google とか Amazon が開発しているドローンは、大体 3mile くらいしか飛べない。大体 5~6Km しか飛べないのですけれども、この UAV は、同じバッテリーで 100mile 飛びます。それは風に乗っていくからです。

次にこれも、先ほど言ったように、人口知能などを使った無人のドローンなのですけど、実は、今、アフリカのルワンダで、血液とかワクチンのようなものを、これを使って届けるという、救急ドローンというものを、先月からもう実際にはじめました。ちょっとビデオがあるのでご覧ください。

(ビデオ上映 英語音声 00:8:19~00:11:26)

○孫泰蔵 (Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO)

というようなことで、ご存知かもしれませんが、ルワンダというのは非常に内戦が起こっていた国でして、もう本当に、国のインフラストラクチャーが全部破壊されています。そういうところで、実は、世界で最も進んだ救急医療ネットワークがここに入ったということで、私たちは「leaping frogs (リーピング・フロッグ)」、「leapfrog (リープフロッグ)」と言っているのですけど、先進国にキャッチアップするのではなくて、一足飛びに最先端のソリューションをつくる。こういうアントレプレナーが最近どんどん出てきているので、私たちはそれを応援すると同時に、さらにそういう人たちをネットワークすることで、コレクティブ・インパクトをつくる。そういう「Social Impact Studio」というものの活動を通じてはじめています。以上です。

○加治慶光 (アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター)

ありがとうございます。とても平和のことを考えていないとは思えないような生き様でありますけれども。それでは、御二方目、鈴木さんに移りたいと思います。鈴木さん、お願いします。

○鈴木寛 (東京大学・慶應義塾大学教授)

はい。大変謙虚な孫さんの後で、また、大阿闍梨の前でお話させていただくのは本当におこがましいのですけれども。鈴木と申します。どうぞよろしくお願いします。

私は、今、いろいろなことをやっているのですけれども、まず、文部科学省の大臣補佐官をやっております、今年 5 月 14、15 日で、お隣の岡山県の倉敷で G7 教育大臣会合がご

ざいました。10年振りに教育大臣が集まって、新しい教育のことを話そうということで、その議長代行をさせていただいたのですけれども。特に今回は、フランス、ヨーロッパでテロがありました。そのホームグロウン・テロリズムの問題などに向かっていくために、やはり教育が、まさに物質文明を支える人材を養成するのではなくて、そのことを卒業して、まさに社会的包摂、あるいは共通価値、そうしたことを大事にする教育に変えていこうという議論をしました。その中で、後でまたお時間があったらお話ししますが、やはり「生命の尊重」ということが一番大事が共通価値なのだ。そういう議論をさせていただいたりしています。

そして、私は、その流れで、OECDの教育局のアドバイザーをさせていただいていますけれども、ここで一番議論になっていますのは、「グローバル・シチズンシップ教育をどうしていくのか」。2018年に向けて、最終的なゴールは2030年なのですけれども、まさにこれだけいろいろな衝突やテロがある中で、そして、これからの子供たちというのは1つの国で教育を全うするという事はほとんどあり得ないわけで、小学校、中学校、高校、大学と、いろいろな国を回りながら、そして、暮らしながら、そういう人たちがどうやって共生していくのかというようなことを考えています。

それから、先ほどもご案内いただきましたけれども、今、文部科学省ではスポーツ文化ワールドフォーラムという。まさにスポーツと文化というのは、私たちは「言語」だというように思っていて、私はサッカー協会の理事もやっているので、ボール1つあれば、ただちにその瞬間から友たちになれる。そういったことがスポーツであり、文化であろうということで、どうやって人々をつないでいくか。そして、加治さんと一緒に、2020年のオリンピック・パラリンピックの招致にも携わらせていただいて、今、準備をさせていただいています。これもまさに「平和の祭典」という原点に立ち返ろうということです。

それから、私は「医療」ということで、内閣官房に医療イノベーション室というのをつくりまして、今はLINK-Jとか、民間の産学のあれでありますとか、あるいは大阪ではinochi未来フォーラムとか、そのようなことを立ち上げているのですけれども、医療関係者と一緒に。

結局、日本がこれからどういう国であるか。世界中の難病、あるいは難病患者さんの光明となり続けていく。そのことでもって世界的に名誉ある地位を占めていくというのが日本の有り様だろうと。そのようなことで医療イノベーションをやっております。

本分は、実は、私は東京大学と慶応大学はじめ、多くの大学で教鞭を執っておりますけど

も、そこではソーシャル・イノベーション、とりわけ、今日、大変、孫さんのお話を聞いてうれしかったのですけれども、やはり「ソーシャル・イノベーションというのはソーシャル・オーケストレーションだ」ということを、ずっと言い続けてきていまして、そのようなことをやらせていただいています。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございます。2つ補足したいのですけれども、アメリカやフランスにとって「生命よりも重要なものがある」ということをおっしゃっておられましたよね。それに対して日本は、「生命第一である」ということを先ほどおっしゃっておられましたよね。そこは。

○鈴木寛（東京大学・慶應義塾大学教授）

はい。倉敷宣言というものをG7でまとめたのですけれども、そのドラフティングの過程で、私もフランスに何度か伺いました。2年前に行われた別の国際会議でいろいろな教育の価値についての議論があったのですけれども、フランス、あるいはアメリカの従来のものであるものは、「命を賭してでも自由と民主主義を守る」と。こういうことが、例えばアメリカ合衆国の基盤であるということで、生命の尊重というものを大事にしようという提案。それはもちろん大事なわけだけれどもという議論が、実は2~3年前にあつて。しかし、まさにこの不殺生の国、そして、「すべての生きとし生けるものに命がある」、そのことを大事にしてきた日本で、G7を開催する意味というものは、やはり「命を大切にする」ということをきちんとコモンバリューに入れていくという。その、少なくとも提案はしようということで、約半年以上、そのような議論を積み重ねまして、その間にあのようなテロのことや難民のことが、昨年ありました。その中で、ヨーロッパも、今、大きくいろいろなものの価値というものを見直しながらやっているのかなということを感じた次第です。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ここ、広島で議論しているからこそ、今、寛さんがおっしゃってくださったようなことがとても重要な意味を持つのではないかと思うのですが、もう1つの質問は、「難病」。これは儲からないという話をされておられました。それと日本の立場。

○鈴木寛（東京大学・慶應義塾大学教授）

はい。実は、難病というものは希少疾患でありまして、患者さんの数が必ずしも多くありません。そうすると、世界的なメガファーマ、ビッグファーマは、なかなか採算が取れないわけですね。そうすると、患者さんが多い疾患についてはどんどんどんどん投資が起こり、そして、その為の研究が進むのですけれども、難病というものはなかなかそういったことが進みませんでした。では、いわゆる経済競争原理で言えば、日本は世界のビッグファーマに一步遅れをとっているわけなのですけれども、そこから、しかしながら、iPSをはじめ、

それこそいろいろなソースを持っている。リソースを持っているわれわれとして「どこ標準を当てていくのか」ということを考えたときに、まさに経済ベースでは必ずしも採算に乗らないと言いますか、大きなプロフィットは期待できないけれども、そこは「産の力」、そして「学の力」、そしてまさに「政府の力」を結集することによって、まさに世界中の難病があれば、やはり、日本だけはそのことと向き合い続ける。絶対に可能性。「絶対に難病が改善することに努力を続けていくのだ」という議論をしながら、今のこの5年間くらい、医療イノベーション5カ年計画の下に、内閣官房に、それまでバラバラだった医療研究開発機構というのをつくり、そして、各大学を臨床研究病院にしていく。今、そのまさにプロセスにあるということです。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございます。難病患者の方々にとって、「最後の駆け込み寺である国でありたい」ということで。

○鈴木寛（東京大学・慶應義塾大学教授）

そうですね。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

大阿闍梨に、お寺の話、平和の話、今、何をされておられるか。

○塩沼亮潤 大阿闍梨（慈眼寺住職）

はい。やっと喋らせていただきますね。ずっと待っていました。私は、2011年に震災がありました宮城で慈眼寺というお寺の住職をしております。小さい頃に、あるテレビ番組を見ました。そのテレビ番組が、実は、修行の番組でした。その修業が1日50Kmくらい山を駆け巡る修行のテレビでした。それで、そのテレビを見たときに、不思議とわからないのですけれども、「この修業がしたい」という思いが胸の中に起きました。それで高校を卒業した後、修行の地である奈良の吉野山に行きました。そこで4年間の修業を積んだ後、いよいよ、この千日、1日約50Kmの山道を16時間掛けて歩き続けるという、そういう修行に入りました。千日と言いましても、1年で約120日しか歩けませんので、9年掛かります。それでその後、9年明けて10年目には、今度は9日間、飲まない、食べない、寝ない、横にならないという修行をしたという経歴を持つ人間なのですけれども、なぜ、私がこういう修行をしたのかということは、また後からお話いたしますけれども、特に私は頭を剃って、仏教徒であります。仏教の開祖は、いわゆる釈尊であります。そのお釈迦様が、まず1つ、言ったことは、「同じことを同じように情熱を持って繰り返していると、悟る可能性がある」と。「ニルヴァーナ」ということですね。この「悟る可能性がある」と。ただし、「情熱を失ってしまったのでは悟る可能性はない」と断言しております。故に、「この初心

というものはずっと貫き通すことが必要なのだよ」という、そういう教えなのですけれども、そういう教えの下に、この日本には 1300 年前から伝統的な修行があります。それは、姿勢を正して呼吸を整えていると、自然と精神が落ち着いてくる。その座って行うこの方法が瞑想、座禅です。

私は、この悟りに至る道、アプローチの仕方は「歩く禅」と言われています。姿勢を整えて呼吸を整えて歩いていると、自然と穏やかな気持ちになってくるという、そういう修行をしているうちに、やはり自分の心の中にも変化が見えてきました。感謝の気持ちがたくさん湧いてきたり、「自分を省みるということはとても大切だな」ということとか、相手に対してリスペクトする、「敬意を払うということはとても大事だな」という、こういう基本的なことに気づいたわけなのですけれども、実は、ニュージャージー州のラトガース大学で今年発表された論文の中に、このウォーキングとメディテーションを組み合わせると、集中力がアップしたり、幸福度がアップするという、非常に効果的なことがあるという、このウォーキングメディテーションというのが、大学でも研究されるようになってきたということは、何かこう、今も昔も共通して何かそういう「体に良い」、「精神に良い」というものが、古今東西問わずあるのかなと。それを今、世界にどんどんと広めていきたいなと、そういう活動をしている途中であります。以上です。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございます。それでは 2 問目なのですが、ここからは、簡単に質問にお答えいただいた後、皆さんにもどんどん、質問とコメント、お考え、こういったものを入れていただけたらというように思っています。

それでは、孫さん。平和とご自分のやっつけらっしゃることに関して、先ほどいろいろなお話をいただいたのですけれども、どのような思いか。また、あるいは自分がやっていることがどのように平和に役に立つのであろうか。その辺りをご質問させてください。

○孫泰蔵（Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO）

今日、このカンファレンスに参加させていただくにあたって、「平和を考える」ということで、実は、あまり普段、本当に考えたことがなくて、自分なりにいろいろと考えてみたりしたのですけれども、なかなか考えがまとまらないというか、「平和」という言葉が非常に抽象的で、非常に崇高なものでもあるが故に、自分自身が、「正直、使いこなせない言葉だな」というように思いました。

一方で、いわゆる戦争状態にあるような、もしくはテロリズムがすごくあるような状況から、市民が非常に不安定な状況にあるところを平常の状態に戻そうという活動をなさって

いらっしやっている人というのはたくさんいらっしやると思います。それは明らかにいわゆるピースキーピング・オペレーション的なこととして、平和をつくり出す活動だということはわかるのですけれども、私は、今、そういう状況にいるわけではなく、特にそういった活動を今、自分がやっているわけではないので。そのような中で、「平和に対してどのような貢献ができるのだろうか」ということが、実は全然考えがまとまりませんでした。

ですから、平和ではない、「非平和な状態」を少しでも平和にするという直接的な活動と、普段、それなりにちゃんと安定的に生きているのだけれど、でもいろいろな社会の問題、課題がたくさんあるので、それを少しずつ改善していこうという活動の中に、2つ、それは違いが明らかにあるということはあるのですけれども、この後者のほうで、何をどうすれば、平和というものに対して具体的に貢献できているのかということが、正直、ちょっとわからなくて。ぜひ、皆さんにお伺いしたいなと僕が思っているようなところが。

ただ、私が今やっているいろいろな活動の根底にあることとして、今、僕の中にあるのは、やはり「資本主義が行き過ぎている」という思いがあります。インターネットが普及したことによって、情報社会になって、例えば、お金などもデジタル化してあっという間に流通する。情報も流通するようになったことによって、非常にいろいろな利便性は上がったのですけれども、例えばマーケットのボラティリティのようなものは非常に増えましたし、金融市場に限らずいろいろなボラティリティが高まっている。それと同時に、トマ・ピケティさんが本に書かれたように、「RのほうがGより大きい」という方程式がありますけれども、いわゆるリッチな人、「富裕層と貧困層の間の格差が広がっている」ということがあります。これは、非常に根本的なアンダーカレンツですけれども、これがどんどん広がることによって、平和を脅かす要因がいろいろなところに生まれてくる。それは例えば、人間の身体でいうと「血圧がとて高くなっている」とか、「脂肪がたくさん付いて身体がだんだん良くなっている」、「成人病がいっぱい増えそうになっている」みたいな、そういうことなのだろうと思っています。

ですので、それを解決するのは非常に難しいことですが、今、シリコンバレーを中心としたアントレプレナー、テクノロジー・アントレプレナーたちは、その新しい価値、アイデアとテクノロジーを使うことで「社会を良くしよう」という動きがすごく出ている。それに対して、ベンチャー・キャピタルとかエンジェルのような人たちがすぐにお金をつけて、その成長をすごく加速させる。こういったメカニクスが生まれているのですよね。このメカニクスを使うことで、社会の課題を解決するスピードを上げる。それは政府にもできない、NPO・NGOにもできない、彼らにしかできない新しいイノベーションがあると思っています。私はそれをやっていくことで、その「格差を少しでも減らしていく」とか、「ボラ

ティリティを少しでも減らす」というようなことが、先ほどの2つある「日常の中で少しでも平和に貢献する」という活動において、私がやろうとしている貢献なのかなど。わからないのですけれども、そのようなことを今、思っています。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございます。それでは、会場から孫さんへの質問、あるいは感じたことのコメ  
ントをいただければと思いますが。はい、どうぞ。クリハラさんお願いします。

○クリハラ

どうも。ハッピークリハラでございます。平和について、結構、おぼろげながら、「平和」というものは皆さんの中にもあると思うのですけれども、果たしてその「平和」というものを定義付けすべきかどうかというのは、とても今、自分でも知りたいところで、例えば「紛争状態ではないこと」とか、そういうように定義付けをしてしまうと、逆にちょっと狭まってしまふかもしれない。では、本当に紛争しなければ平和か。家庭内で引きこもって全然口を聞かない状態って、それは本当に平和なのかとか。その辺で、平和というものをどう捉えるべきか。あるいは定義付けすべきか。その辺についてももしお考えがあればなと。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

では、もうお1人（質問を）、お取りしていいですか。あのサクセガードさん、まさにその辺りの領域の専門家でいらっしゃいますので。

○パー・L・サクセガード（ビジネス・フォー・ピース財団創設者・会長）

パー・L・サクセガードでございます。ノルウェーからまいりました。ご存知のように起業家でございます。ビジネス・フォー・ピースという財団を設立いたしました。おっしゃったジレンマにちょっと貢献させていただきたいと思います。ご自身にとって「あまりピースというのが近いもののように感じない」というようにおっしゃるのは、平和というもの、「暴力がないものを平和」というように定義付けられているからそういうように感じるのだと思います。平和、ピースというのは、制度であったり、姿勢であったり、もっと平和的にすることができるものであります。例えば、昔は薬というものは疾患を治療するものであります。でも今では、より健康になることができるか、健康を維持することができるかというように人々は考えるようになりました。医療というのは「病気でない」ことだけではなくて、医療というのは「より健康に」ということに意味が変わってきているわけでありまして。それと同じように、シリコンバレーの例もおっしゃいましたけれども、それはまさに平和に貢献しているわけでありまして。従いまして、「紛争がない」というだけではないということでありまして。

○孫泰蔵 (Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO)

まさしくそのとおりだと思いますけれども、私としては、そう言う、「あらゆる活動は平和に貢献するのだ」というように言う、あまりそれは「議論したことになるのだろうか」ということを感じてしまうのです。それはもちろん、いろいろな活動が、社会の課題を解決する。それはもう営利であれ、非営利であれ、社会に新しい価値を生み出していけば、それは平和に貢献することだとは思いますが。

それだと、具体的に何か違うアクションなどが生まれるのだろうか。どういうストラテジーを組めばいいかという議論が深まるのだろうかというのが、むしろ、私は教えてほしいです。私は答えられなくて、「ディフィニションをどう付けるか」というのは本当に難しい問題ですよ。大阿闍梨はどうお考えになりますか。

○塩沼亮潤 大阿闍梨 (慈眼寺住職)

直接的な答えが、今、お話を伺いながら聞いていたのは、例えば、私も平和と。常にやはり心の中で、私は平和を、実は、心の中で、出家する前に、世の中の世界の平和をちょっと考えて、それに貢献できる人間になりたいという思いで、実はお坊さんになって、その修業に挑んだのですけれども。ただ、孫さんが先ほどおっしゃったように、確かに「どうやって定義付けていいのか」と、今、いろいろとお話を伺いながら改めて考えていたところ。まだ、私も途上であって、ありとあらゆることに挑戦しています。

例えば、私は日本人で生まれて、この小さな島国でしか生きていなかった人間です。海外に行ったときに、頭の中でボワンとこう、先ほどおっしゃっていたようなイメージで平和というものでいけば、実は 8 月に 1 カ月間アメリカに行ったときに、とてもひどい思いをしました。というのは、われわれはハイコンテクストとって、特に修行者はほとんど言葉を使いません。けれども、アメリカのニューヨークに行くと、いろいろな民族が集まって、それぞれいろいろな考え方が、もう議論好きなのです。私、修行していた人間なので、右脳しかなかったもので。たぶんレントゲン撮ったら左脳がなかったと思うのですけれども。でも、私は初め、褒められても伸びるタイプなのですけれども、追い込まれても伸びるタイプなので、たぶん 1 週間くらいで左脳ができあがったと思うのです。それで、そうだと、これからやはりマーケティング・ピースとって、これを世界に発信していくためには、では、「日本の平和って何？」という。外国の人から見て、「あなたたちが。今、議論しているこの平和というものは一体何なの」ということが、手に取るようにわからないといけないと思うのです。

例えば、この地域の名産であります八天堂のクリームパンの社長さん。「なぜ、ここまで発

展したのですか」と昨日、お伺いしたところ、「それは、パンとスイーツと、あとはお土産。そのコンセプトがボンと一緒にあって伝わったのだ」と。非常にわかりやすい。マーケティングに非常に成功したわけですね。

では、私たちがここで議論しているものが、海外の人にどのように受け取られるか。その受け取られた価値がやはり大切。「どう受け取られるか」ということが大切だと思うのですね。それがこの平和というものがこれからどんどん皆で構築していかなければならない。一歩ずつ、1つにだんだん考え方がまとまっていかなければならないことなのかなと、頭の中で考えながら、今、いたのですけれども。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）  
いかがでしょうか。

○フィリップ・コトラー教授

それでは私のほうから少し申し上げたいと思います。「マーケティング・ピース」ということですけれども、これは良心をマーケティングする。すなわち「良心の高いレベル」ということになります。そして、人々がそれぞれに家族の方であるとか、友人の方であるとか、そして国のことを思いやる。そして、世界のことを思いやるということなのです。

あなたはお坊さんであるということですが、実際に貢献ができるか。例えば、「メディテーションをすることによってどういう貢献ができるか」ということですね。世界は、今、非常にストレスを感じています。

女性がいます。この女性はカトリック教だったのですが、日本に来て、そしてヨガをはじめたのです。そしてメディテーション、瞑想をはじめたのです。そうして、彼女は非常にワクワクしました。すなわち、彼女はこの「良心」というものが、心の中でさらに上がってきて、マインドフルネスという力を使ったのです。そして、彼女はまたアメリカに戻って来て、マインドフルネスを高めるためのセンターをつくりました。インスティテュートをつくったわけですね。そして最初に Google とコンタクトしたのです。Google の経営者が言うには、Google のエンジニアやデザイナーはコーディングをする時に、非常にストレスを感じている人が多かったのです。そこで、最初に行ったことは何か。「ストレスを取り除く」ということだったのです。マインドフルネスというのが、Google だけではなく、警察、ロサンジェルス警察の本部であったり、あるいは軍の本部であったり、さまざまなところで展開されているわけです。こういったことが実際起きているのです。すなわち、良心をつくる」と、「コンシャスネスをつくる」ということ。これはマインドフルネスによって起きているのですけれども、マインドフルネスというのはメディテーション

と呼ばれているものだと思います。瞑想と呼ばれているものだと思うのですが、瞑想に関してはどのように思われますか。瞑想、自分の生活を、平和裏に進めていくために皆さんの歴史があると思います。その瞑想はどのように貢献できるかということについてお話し願えますか。

○塩沼亮潤 大阿闍梨（慈眼寺住職）

はい。仏教というものは、ひとつの人生をより良く生きていくための考え方なのだと。人間は身体と心のバランスが非常にやはり大事です。まず、生活とか身体の部分。心身を整えることによって、やはり心と体はつながっておりますので、その整える方法をレクチャーしてくれるものだと思います。なので、まず、姿勢と、あと呼吸と、あとはそれによって精神が安定してくるという。これがわれわれに伝わっているメディテーションの方法です。

○フィリップ・コトラー教授

それから、もう1つのメッセージがあると思います。実際に、「無になる」ということですよ。何かを欲しくなる」ということ。これはどちらかという不満をもたらしちゃうのですよね。仏教の中にはあると思います。その苦を除くために、あまり求めないということが重要。すなわち「無」のほうが重要だということだということですよ。こういったフィロソフィというのは、人々にとっても意味のあることなんでしょうか。それとも私の考え方は間違っていますか。求めないことが良いことだということなのですか。

○塩沼亮潤 大阿闍梨（慈眼寺住職）

われわれが生きていく上では、やはり環境が、常に100%ではありません。それによって、100%の環境でなければ、ストレスを感じることもあります。けれども、例えば100点満点のうち、50点の環境とか、40点の環境であっても、「0点ではないではないか」と。その、今ある環境にとっても感謝をする気持ちが大切だということです。

それで、やはりこの私たちの心には、ポジティブに考える考え方と、ネガティブに考える考え方があると思います。この心の真ん中に針があるようなもので、常に揺れ動いている。この揺れ動いている心なるべくプラスの方向、ポジティブの方向に考えるアイデアが、やはり日本の仏教の考え方でもあります。

○フィリップ・コトラー教授

例えば、お聞きしたいのです。われわれ、物質主義的過ぎるのではないか。そして、これで戦争や戦いが起こっているのではないか。われわれはものを求め過ぎるのではないかということなのです。われわれはこの哲学、理念というものをさらに、すなわち物質主義に

ならない。すなわち物やサービスにあまりにも固執しないような、そういった精神ということが必要である。それを広げることが必要だと思うのです。これがマーケティング・ピースの心だと思います。

われわれの文明のエッセンスですけれども、これはもっとも何かを欲しがるということですね。友人であるとか、愛する人を欲しがるよりも、物を欲しがるということなのです。これは矛盾だと思います。われわれの生活の中にある矛盾ということで、平和な人々になるための障害になっているのではないのでしょうか。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

プロフェッサー、ありがとうございます。それでは次に。鈴木さんと平和の関係。あるいは、鈴木さんの領域でやっておられることがどのように平和に役に立つのであろうか。この辺りをお話いただければ。

○鈴木寛（東京大学・慶應義塾大学教授）

今のご議論、非常に面白く聞かせていただきました。と言いますのも、私、もともと通産省にいたのですけれども、それを辞めまして、もう20年経ちます。それで、私がおの頃からずっと考えていることが、今、ご議論があった「近代を卒業する」、「卒近代」ということをずっと考えています。まさに、近代の本質というのはマテリアリズム、物質であって、またそれをどうやって効率的に、まさにグロス・ドメスティック・プロダクトを増やしていくか。その仕組みが資本主義という仕組みだったわけですが。やはり、そこにいろいろな意味で限界が来ているというように思います。環境の問題もそうだと思います。

それから、今の、特に成熟国の問題は、これは法哲学会の会長の井上さんが言っていたかもしれませんが、「経済の貧困よりもやはり関係性の貧困だ」と。ということで、私もまったくそうだなというように思うのです。それで、日本は非常に成熟して、物は豊かになっていますけれども、やはり「いじめの問題」だったり、あるいは独居老人の、まさに「無縁社会」という言葉が非常に。だから、子供も、そしてお年寄りも、縁が薄くなっている。無縁になっている。こういう問題、どうやってこれをもう1回、私たちは社会関係資本というようなことを言っていて、今までの生産資本だけではなくて、自然資本も大事、そして、そうした人的、あるいは関係資本。こういったことをもっと議論する中で、今、まさに私が学生たちとやっていることは、「幸せの再定義」ということを、どういうようにしていくのかなということなのかと思います。その中に、われわれは、本当にこの2000年来の「足るを知る」という、そういうことをずっと、われわれの、まさに体の中に染み込ませて、そんなことをも振り返りながら、世界の皆さんと考えていければいいのではないかなというように思います。

それで、本当に、今日の会議は、開催をしていただいた湯崎知事はじめ、準備していただいた方に感謝したいのですけれども、私は、この十数年、「熟議」ということも言っていて、英語ではデリバレーションですね。まさにこういうものは難題です。難問です。しかし、これからはまさに難問に向き合うことこそ、人間の役割であって、それ以外のことはAIに任せていけばいいので。こういう、答えが直ちにできない問題こそ、本当に「いろいろな人たちと熟議をし続けていくということ」のチャンスをおつくりいただいたということに、心から感謝をしたいと思います。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございました。プロフェッサーから。マイクをお願いします。プロフェッサー。

○フィリップ・コトラー教授

皆さん、今、「幸せ」ということを言われました。それについての研究ということと言われました。重要なのは、クオリティ・オブ・ライフをGDPで尺度をすることは間違っていると思います。それは重要ではありません。国々でわかってきたのは、2つ目の尺度が必要だということです。それは、インデックス・オブ・ハピネス、幸せの指標。あるいは、幸せが上手くいっているかどうかですけれども。

英国において、実際にGDPが上がっただけでは喜ばない。幸せ、幸福ということ自体が、この幸福の指標はブータンから来ました、皆さん、ご存知だと思いますけれども、ブータンの国王がそれをつくりました。そして、人々に、「私も幸せになりたい、そして、そのためには王ではありたくない」と。いや、王であることを辞めることはできないですよ。というのは、私たちが幸せにする役目があるのですから。そうすると幸せ指標が下がってしまいますから。ということをしていました。この「幸福の指標」ですけれども、これを、国によってその尺度が違うと思います。デンマークというのは非常に幸福度が高いです。幸福ということが、1日のうちでも上がったり下がったりします。分ごとによって変わってしまいます。

それで、続けて「慢性的にハッピー」ということはあるでしょうか。そういった人に会うことがあるでしょうか。私は、それよりも、ウェル・ビーイング、その状況ということに、状態ということに、良い状態ということのほうに関心があります。運動したり、栄養があったり、そして教育を受けたり。そういったことです。いろいろな指標がそれにウェル・ビーイングには関係があると思います。もし、GDPが上がると、そうするとウェル・ビーイング、安寧、福利というものは下がってしまうということがあります。ウェル・ビーイングが下がってしまう。

そして、平和はどうでしょうか。世界が平和であったら、世界はもっと幸せになるでしょうか。そしてより良いウェル・ビーイングがあるでしょうか。ですから、真ん中辺りを考えてみるべきだと思います。何から平和が来るか。まず、ウェル・ビーイングがある。そして、幸福があるということ。

○孫泰蔵 (Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO)

そうですね、それはよくわかります。よくわかりました。

○フィリップ・コトラー教授

ですから、あなた、孫さんは平和のために働いているのですよね。

○孫泰蔵 (Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO)

そうですね、理解できたと思います。ウェル・ビーイングのためですね。

○湯崎英彦 (広島県知事)

主催をしている立場から申し上げますと、今、ちょうど孫さんと鈴木さんの 2 人の議論で出てきたと思うのですけれども、まさに、「何が平和なのか」ということは熟議が必要なことで、いろいろな考えがあって、今のコトラー先生がおっしゃったようなこともあると思いますけど、そういうのを、まさに発見するプロセスで、ここはありがたいなというように思いますので。それはもう今回でいろいろ出てくるとは思いますし、また継続して、議論が必要なことかもしれませんが、それを考えること自体が、私は、価値があるのかなというように思います。

それからもう 1 つは、この「資本主義の限界」という部分ですよね。これは、資本主義の根本のところをもう 1 回立ち返ると、ベースには功利主義があって、ユーティリティですよ。ユーティリティというのは必ずしもマネタリーなものだけではなくて、そこが「何がユーティリティとして受け止められるか」というのは、結局、私は教育だと思うのですよね。「どこに価値があるのか」ということをどのように教えられるかということだと思うのですよ。マネタリーな価値というのは、やはり一定必要なことですから、皆、追求するのですが、やはりどのような、ほとんどの国では、自分のお腹がすいて、ご飯を食べて、まだ足りないからと隣の人のご飯を食べると怒られますよね。それはインモラルであるということですね。その、「では、何をしたら良くないのか」というところが、結局、価値観であり、教育であると思うので。そういう意味での「教育の力」。それが結局、平和にもつながっていくところで、われわれが、今、例えば、先進国で安いものを手に入れるために途上国の子供たちをかなりきつい労働に置いて、搾取的にやっているということは、そ

れは良いことなのかというような議論につながっていくと思うのですね。そういう「教育の価値」というのがまた語られたら、私はいいのではないかなというように思っています。

#### ○フィリップ・コトラー教授

日本は、2020 の機会があると思います。こういった対話を続けていくこと、そして、2020 に向かえば、そのときには日本はオリンピックを開催し、そういった国だけではなくて、非常にはっきりとした考えを持って平和を論じられる国である。そして、そういった国になるのではないのでしょうか。広島の立ち位置が非常に重要です。

「教育」ということを言われました。皆さんもキッザニアに行くチャンスがあるといいと思うのですけれども、日本にあります。キッザニアをご存知ですか。すごいです。子供が幸せで、すごく満足するところだと思いませんか。親が何をしているか、親がどのような職業に就いているか知らない子供が多いのです。キッザニアでは、パイロットもあるし、マクドナルドも経営できるし、弁護士にもなれるし、議員にもなれます。こういった子供たちは本当に成長します。そして、世界がどのようなものかというつながりが見えてくるのです。キッザニアというのは、私の学生がはじめたのです。ザビエル・ロペスさんがはじめたものです。

私のクラスで話しているのは、「何をするつもりか」。自分のビジネスを上手くする、「どのような良いビジネスをするのかいつも考えろ。」と言っています。ディズニーは素晴らしいです。素晴らしいし面白いものを提供してくれます。ただ、知識は提供してくれません。キッザニアは知識を提供するのです。ディズニーが彼（ザビエル）を買収しなければ良いけどと思いますけれども。現在、23 カ所においてキッザニアがあります。12 から 23 に増やしたのです。これも、私たちは公立学校をやめてキッザニアだけを開設したらいいと思います。そこで子供が本当に夢中になります。行って、子供を見てください。本当に生き生きとしています。学校ではしょんぼりしていても、キッザニアに行くと生き生きとしています。これをやらなくてはなりません。

#### ○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

フロアの方からもコメント、クエスチョンをいただきたいのですが、お三方のどなたでも構いませんし。では、キムラさん、どうぞ。

#### ○キムラ

鈴木先生にぜひ。ちょっとこれはお願いになると思っているのですが、特にスポーツの分野が、国際的には国連などでは、「United Nations Office on Sport for Development and Peace」というしっかりとした、室なのか部というレベルなのかわからないのですけれども、

チームがありますというところで、スポーツの有効性。開発だとか、この文脈で言うならば民族の融和ですとか、そういうところに非常に有効であると。それをどんどん使っていくという、スポーツの価値が国際的には評価されている一方で、日本ではあまり、今、言った、例えば「UNOSDP って知っている？」と言ったら、たぶん 100 人聞いて 100 人知らないのが日本かなというところで、私は少しスポーツに関わっている人間なので、非常に残念に思っております。

お願いと申し上げたのは、やはり 2020 年に向けて、今、スポーツショーができて、非常にスポーツを基幹産業にまで育てようというこのタイミングで、スポーツを通じてどうするかという議論が活性化する中で、スポーツの価値というものをやはり見直していく中で、今日のような議論というのは、非常に必要だと思うのですね。やはり基幹産業に育てる上で、では、その価値に含まれる世界平和ですとか開発に、これだけのインパクトがあるツールというのを。

ちょっとお願いというかたちですね。というのは、孫さんがおっしゃったような疑問というか、リアクションをした友人がとても多くて。要は、(この会場に) 来なかった友人が、「そもそも平和って何だろう」というのがとても遠いというところで、やはり 2020 年に向けて、そういう議論を、スポーツを通じてやっていくことで、その具体的な事例が非常にわかりやすく出る。日本人でもサッカーの元日本代表の中田英寿さんですとか、宮本さんなどが、そういう活動をされていて、非常にそれを聞くと具体的に身近に感じられるというところで、やはりその「平和」というとても抽象的で壮大なテーマに関して、やはりそれを身近に考える。

○加治慶光 (アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター)

「スポーツを通して平和を考えていこう」ということをお願いするということですね。了解です。次の方。はい、どうぞ。

○トウドウ

キャンプファイヤーのトウドウです。質問ではなくてコメントなのですがすけれども、最初の議論で、「日本において平和とは何か」というものがあつたと思うのですがすけれども、年間 3 万人前後の方々が自ら死を選ばれている現状があつて、10 年間で 30 万人くらい。これは内戦、下手な紛争よりも多いかもしれないと思っています。

これは一例なのですがすけれども、一人ひとりの中で戦争と戦っている、戦争状態にある方々という人も、見えないけれどもたくさんいらっしゃると思うので、イノベーションですとか、教育ですとか、仏教、宗教ですとか、あとはマーケティングの力で、こういったもの。

なかなか目に見えない戦争状態というものも解決するようなことができればいいなというように感じました。以上です。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）  
それは面白いですね。自殺について。はい。徳力基彦さん、どうぞ。

○徳力基彦（アジャイルメディア・ネットワーク株式会社取締役CMO、ブロガー）  
先ほども（話に出たように）、資本主義で「金銭的価値を基準にするから行き過ぎてしまう」、「ボラティリティが高くなる」という面があると思うのですね。孫さんが新しくされているような、たぶん価値のある活動、あえて「量ではなく質」というように見た場合に、何を基準にそれが「良い」と評価するのかという、何か指標みたいな、ヒントはあるものなのでしょうか。お金はわかりやすいので、「いくら稼いだ」「成功した」という基準はわかると思うのですが、それを少し投資家である孫さんの視点と、あえて大阿闍梨にお聞きできればと思います。

○孫泰蔵（Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO）

はい。私たちが出資をしたりしている、スタートアップは、売上とか利益の成長、伸びが一番の基準ではありません。そうではなくて、実は、先ほど先生がおっしゃったことなどからも僕はとてもはっきりしてきたのですけれど、「人がウェル・ビーイングな状態になることに具体的にどれだけ貢献しているか」。例えば、先ほどの Zipline という UAV の会社だと、本当に血液が届かなくて死んでいる子がたくさんいる。それをバッと 15 分で届けられると、「何人助けられた」というのは明確な指標があるのですよね。そういったことによって、「これだけの人の命を助けられた」とか、もしくは、水がなくて困っているところが、「これだけ水を潤沢に使えるようになった」とか。

まずやはり、日本で考えると先ほどの方がおっしゃったように、心の問題とか、無縁社会といった「コミュニティが崩れている」ということが問題で、基本的なものは割と満たされているのですけれども、世界を見渡すと、その基本的なことが満たされていないところがとても多いので、そういったところに対するソリューションを出すような会社を、今はやはり応援するというのが、私の場合ははっきり戦略としてはあります。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）  
大阿闍梨さん。

○塩沼亮潤 大阿闍梨（慈眼寺住職）

私たちは、「一隅を照らす」という有名な言葉があるのですけれども、たまに人と変わった

修行をして、ある一定の期間、山に籠ったりするので、そこをクローズアップされる場合もあるのですが、私の師匠から、(この道に) 入った頃から言われていることは、「とにかく日常で出会った人を大切にしてください」と。「向かい合った人を喜ばせてください」という、これを「追従(ついで)」と言うのですが、「追い掛ける」という字に「従う」と。お坊さんはそこが一番大事なのだと。どのような相手に対してでも敬意を払って、そして、その人が喜ぶことを言おう、喜ぶことをしてください。これが「一隅を照らす」ということであって、その延長線上に、国家の幸せであったり、世界の幸せであったりにつながっていく。あまり大きなことばかり考えずに、この一つひとつの今日一日という中に、どれだけ大きな学びがあるかということを中心にしてくださいと教わったので、出会った人を喜ばせることが自分にとって今日一日寝る前に「良かったな」と思うことが、自分の「今日も良いことをした」という、そういう価値観になってくると思います。

○加治慶光 (アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター)

ありがとうございました。次の質問、コメントを、どうでしょう。井上さん、お願いします。

○井上高志 (株式会社ネクスト代表取締役社長)

ネクストの井上高志です。どなたでもお気づきがあれば教えてください。今回の、世界平和、国際平和のテーマは、人類とか人とか人間社会を中心に議論されているような感じがしますけれども。特に大阿闍梨はもう千日回峰行をやっている中で、悟りの中できっと「自然とどう調和して生きていくのか」とか。つまり「地球」という規模で見たときに、その中で、「人類は生かされている存在」なので、そうすると、水や食料やエネルギーやさまざまな自然の恵みをもたらして生きていますので、そことどう調和していきのかというのも平和をつくっていく観点の中では大事なのではないのかと思ひまして、何かお考えがあればお聞かせください。

○加治慶光 (アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター)

お答えられる方からいきましょうか。では、大阿闍梨。

○塩沼亮潤 大阿闍梨 (慈眼寺住職)

はい。やはり、1人の人間。私1人。例えばここにいるとしても、この大自然と、そして宇宙とつながっているわけなのですね。自分自身のこの精神のバランス。これを崩してしまうことによって、何か自然のバランスも崩れてくるのではなからうかと。われわれ、大勢の、全世界の人たちと、大勢の人たちのバランスを崩せば、当然、地球の環境、バランスも崩れてくるわけなので。やはり、足ることを知って、お互い思いやる。そして、他を思う愛と祈りの高い世界に、精神性が高い世界に私たちは行かなければ。やはり、いろいろ

なものとの調和というものが取れないので、共存もできないのかと思っております。

○孫泰蔵（Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO）

私は、自然環境に対することとして、20 世紀に、非常に人間はたくさんのごみを地球上に撒き散らしてしまったというのがあって、それをやはりちゃんと綺麗にして、少しでも戻していかないと、これから生まれて育っていく子供たちのために申し訳ないということがありまして、3 つやっております。

1 つは、宇宙のゴミがたくさんあるのですね。「スペースデブリ」と言うのですが、アメリカとかソ連とか中国とか、いろいろな国が打ち上げたものが破裂して、とても小さなゴミなのですが、ものすごいスピードで（宇宙を）ワーンと回っていて。実は人間を乗せて地球外へ飛び立つことができなくなっているのです、今、『ゼロ・グラビティ』という映画があったので、皆さん知っている方もいらっしゃるかもしれません。それを除去しようという取り組みをやっている、シンガポールと日本の合同のスタートアップがあります。そこを、今、応援していて、今年の終わりに 1 号機のテストが始まるというところがあります。

それから、これはまだ私たちは正式に世の中にアナウンスはしていませんが、オランダの NPO で、わずか 23 歳の若者が考えたアイデアなのですが、「オーシャン・クリーンアップ」という NPO がありまして、「海のゴミを全部片付けてしまおう」という、iRobot 社のルンバみたいなものを海でザーンとやるということを本当にやろうとしている人がいます。私たちもそれを全面的に応援しようということがあって。実は、そのファースト・プロジェクトの候補に、日本の対馬が選ばれようとしています。なので、私たち、特に日本人は、海からいろいろな恵みを得ていますので、その海をちゃんと綺麗にすることで、本当に「それができるよ」ということを世界に示して、ほかの国の方々にも、ぜひ、それを採用してもらおうということをやりたいというように思います。

ほかにもう 1 つ、あるのですが、要するに、そういう取り組みを。まずは「片付ける」と。クリーンアップするということで、私はいろいろと貢献しようかなと思っています。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

鈴木さん。

○鈴木寛（東京大学・慶應義塾大学教授）

教育の中で、特に、小学生とか中学生というものの「身体知」というものが今少し忘れら

れつつありまして。やはり自然の中で、自然の素晴らしさということを感じていく経験というのが、本当に少なくなってきました。そういうことを。いろいろなことをきちんと定義付けたり、指標化するということはとても大事なのですが、その一方で、やはりなかなか言葉にならない、なかなか数字にならないことを、でも、「そこにどう共感をつくっていくか」ということはとても重要で、その1つが、自然との共生といいますか、本当に自然の中で生かされているわけです。人間も自然の一部でありますから。ということは、いろいろなところで、これから、教室の外での学び。地域の方々にいろいろな里山で、あるいは野山の中で、ということを取り入れていきたいと思います。

それから、少しアナウンスなのですけれども、来年、私は、日本レースラフティング協会の会長というのをやっています、大歩危小歩危、吉野川の上流で、来年やろうと思っているのです。まさにこの大自然の中で。日本というのは素晴らしい山と川がありまして、広島にもたくさんあると思いますけれども、そういうことを、そして、「友人と一緒に川を下る」という、この体験が、「自然のありがたさ」、そして「仲間との絆」みたいな。このようなことをもっともっとやっていきたいなということを考えています。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございました。ほぼ終了の時間となりましたので。はい。竹内真一先生、では、最後に。

○竹村真一（京都造形芸術大学教授、Earth Literacy Program 代表、丸の内「触れる地球ミュージアム」主宰）

すみません、時間がないようですが。次のセッションで、私、(モデレーターを)やらせていただくのですけれども、まさに「地球環境問題」と。人間だけに閉じこもらない議論をさせていただきますし、また、シリアの内戦とか、アラブの春とか、実は、干ばつとか気候変動とか水問題、食糧問題、それが底辺にありますので、そういう問題にどういうように対処していくか。その辺を次のセッションで私もやらせていただくことになっています。

そこで、水も電気もなくてもしっかりクリーンなトイレ環境をつくれる技術とか、そういうものが基本的には平和を促進していくことになるだろうというように思いますので。本当に、人間界と自然界をつなぐ。そういう「ピース・テクノロジー」のようなことを議論したいと思っているわけですが。

もう1点。今日の議論で、皆さんのお話とつながると思うので、指摘しておきたいのは、私たち、もう1つの、外側の自然ではなくて、私たちの内側にある自然。そのすごさというものに、これほど気づきはじめていない時代はないと思います。例えば、先日のノーベ

ル賞のオートファジー。私たちは毎日新品になり続けています。私たちの持っている道具とか自動車が、毎日、部品を入れ替え続けて新品になり続けたら、それは大変なことですよ。でも、私たちの体というのはそれを平然とやっているのです。毎日 2000 億から 3000 億もの細胞が入れ替わって、毎日新品になりながら、私たちは自分を維持している。自分の中にどれほどのとてつもない自然があるかということ、科学的な知見をもとに、改めて再発見しつつある。

植物がやっている光合成というのは、実はどれだけすごいことかというのは、人間が人工光合成を達成しつつあるが故に、ようやく改めて、そのすごさを再発見しているのですね。

何が言いたいかということ、私たち自身が生きていくということとか、当たり前、自然が、こうやって自然の営みをやっているということに対するリスペクト。改めて、そういうもののリスペクト。そして、平和とは。「何のために平和をつくるのか」といったら、そういう、この宇宙の中で、非常にレアな、稀有の、こういう価値創造をしている私たちの星の営み。そして、このなかんずくその中で人間というものが、大変な、その価値創造の価値を高めている。その価値を最大化する。それをスポイルしているのが戦争であり、内戦であり、格差であるということになれば、「何のために平和を実現するのか」と。この星の価値創造のそのダイナミズムを最大化すること。

少し新しいレベルで、「平和の目的」というものを語れる時代になってきたと思いますし、そこに身体知とか、阿闍梨がおっしゃっている内的なピースとか、そういう問題が、改めてつながってくるのではないかというように思うのですね。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございます。すみません、時間が過ぎていますがけれども、一言ずつメッセージを。この場と、それから YouTube で配信されておられる方に、ご覧になっている方に、いただければと思います。

○孫泰蔵（Mistletoe 株式会社 代表取締役社長・CEO）

はい。今日、冒頭に、私は「平和というものがわからない」という質問を投げ掛けてしまったのですが、今日、皆さんのお話を聞いて、少しわかったことがあります。それは、ピース、平和というのは、アウトカム、結果であって、その「結果が生まれるために何をどうしなければいけないか」。人間の「健康」と一緒ですね。「健康である」というアウトカムが出るために、例えばエクササイズをすとか、心を鍛えるとか。そうすれば、本当に、まさに、大阿闍梨のようにそういった瞑想をするだとか、修行をするということ、を日常の生活に取り込むとか。いろいろなことをすれば、結果として「健康になる」とい

うように、社会も「平和になる」。そのアウトカムと手段と、その関係性が、僕は考えたことがなかったが故に、あまりにも整理されていなくてわからなかったのですが、その関係性が少しわかった気がしています。なので、私自身もこれから、今日をきっかけに、ぜひその辺りを自分なりのフレームワークをつくって、自分が死ぬまで、死を迎える日まで、平和に向かって頑張っていきたいなと思いました。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）  
では、寛さん。

○鈴木寛（東京大学・慶應義塾大学教授）

本当に、改めてこういう素晴らしい熟議を開いていただいたことに、本当に心から感謝を申し上げたいと思います。私も今日参加させていただいて良かったなと思います。このことに報いるためには、いろいろなご縁のあったところで、皆が実践をしながら、またそこでいろいろなことを学びながら、またここに帰って来て持ち寄るということが続けていければいいなと思います。

それからもう 1 つ。今日、ここに集まっておられる方は、本当に素晴らしい、こういう実践と熟議ができていますのですけれども、世の中のキャピタリズムのプレッシャーというのは本当にすごくて、毎日、その板挟みにわれわれは遭うわけですが、とりわけ、子供はまだ真っ白なので、何か良いアクションをすれば、あるいは良い環境、良いご縁を作れば、割と上手くいくのですけれども、実は、問題なのは、大人の側のアンラーンでありまして、やはり既に学んでしまった資本主義のメカニズムであったり、この物質文明であったり、そういったことをどうやって。「アン」というのは、要するに、学んでしまったことというのは忘れられないのですよね。だから、そこをどう超えていくかというのは、一番難しいなということをおもっています。また、そんなことも皆さんと議論できればいいなというように思っております。本当に今日はどうもありがとうございました。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）  
ありがとうございました。大阿闍梨、では、最後に。

○塩沼亮潤 大阿闍梨（慈眼寺住職）

はい。ありがたいことに、私は、世界をこの前、歩いて、キリスト教の若手の方、イスラム教、ユダヤ教の若手の、非常に実力者とお会いする機会がありました。おおまかに言うと、若い方を中心に壁はなくなってきているなど。「他の宗教を認める」という、そういう考え方になってきつつあるという、そういう傾向がありますので、これは非常に良いことだと思います。

どンドンと対話をして、お互いがつながっていくような、そういう活動に、貢献が、自分  
ができたらなと思っております。本当にこれからは、いろいろな壁をつくる時代ではなく  
て、さらに、ひとつ高みに登ったところで、皆さんがつながり合うという時代になってく  
ると思います。そのときに大事なのが、やはり幼少教育だと思います。「嘘をつかない」と  
か「約束を守る」とか「相手に対して敬意を払う」とか「好き嫌いをなくす」とか、こう  
いう、子供のうちに与えられる、そういう教育がやはり大事だと思います。

いろいろ、世界に行ったときに、そういう部分を、私は評価される場面がある。そういう  
ことを教えてくれた親に、まず感謝しております。こういう基本的なところから何かが変わ  
っていくかもしれません。ありがとうございました。

○加治慶光（アクセンチュア株式会社チーフ・マーケティング・イノベーター）

ありがとうございました。平和の実現は、外交的なものや軍事力、あるいは各国の抑止力。  
そういったものによって実現されるという話というのは非常に重要だとは思いますが、一  
方で、ソフトパワーと呼ばれる、宗教、教育、ビジネス。そういったものがわれわれに与  
えてくれる希望の光を感じられるような、素晴らしいセッション。改めて、3人の素晴らし  
いパネリストの方に拍手をいただきたいと思います。ありがとうございました。

(了)